

日高 伶 (石川県金沢市)

タイトル「とっておきの」

君の柔らかい手を引いて、花火が弾ける夜空の下を駆けていく。

「とっておきの場所があるんだ」

そう。水の流れる音が優しくて涼しい、素敵な橋があるんだ。

そこからなら背の低い君でも、ちゃんと花火を見られるから。

「もう少しだよ」

もうすぐ、この坂を下りれば、

——たくさんの、人の影。

そしてそれらから聞こえてくる、ざわめき。

うるさい子供を連れた親子連れ。

人目など全く気にしないでいちゃつくカップル。

人相の悪い集団に、汚そうなオヤジ。

見知らない無数の顔が、僕の「とっておき」だった場所にひしめいていた。

こんな奴ら、一体どこから湧いてきたんだ？

胸が焼けるように憎くて、締めつけられるように苦しく、吐き気を感じさせるように気持ち悪かった。

何よりも、ここまで無理に走らせてきた彼女に悪くて。

「あれ？ おかしいなあ」

茶化しながら、まるでアルコールみたいだと思った。

時間が経つと、跡形もなく勝手にどこかへ消えてしまう。

僕の「とっておき」も、時の流れの前に消えてしまったのだ。

確かなモノが何もないことが、僕の足元さえも不安定にさせた。

ふと、服の裾が引っ張られているのに気付いた。

振り返ると、彼女はいつも通り楽しそうな顔。

まるで、何も問題なんてないという風に、こう言うのだ。

「いいじゃない。君とわたしが居れば」

一瞬、僕は負の感情が見透かされてしまったのではないかと怖くなった。

そして僕の動揺に滑り込むかのように、その言葉が心に届く。

その優しい不意打ちに、ぼろぼろと涙が溢れた。

カッコ悪い。目をゴシゴシとこするが、涙は次から次へと溢れて止まらない。

「あ。ねえ、あれ見て」

沈黙を埋めるように、彼女が空を指差した。

顔を上げると、そこにはぼやけていたけど、丸い月があった。

「あっちの方が綺麗だからさ、あれを見てようよ」

——ああ、こんな大事な人に、どうして巡り合えたのだろうか？

涙声にならないように、僕は何とか、これだけを搾り出す。

「ありがとな」